

第六回 雅楽フェスティバル 演目紹介

管弦

国歌 君が代

明治13年に宮内省式部職雅楽課（現宮内庁）が日本が長年守り続けてきた『雅楽』の壱越調という旋律で作りに上げた曲が原曲であり、雅楽の旋律のため吹奏楽では演奏ができず、西洋楽の旋律に編曲したものが現在一般的に用いられている。本日演奏する君が代は、西洋楽を用いて編曲される前の原曲となるもの。

琵琶	岩田法智華		
箏	杉本沙也果	木全 結菜	
鞆鼓	玉樹 智史		
太鼓	佐藤 芳彦		
鉦鼓	白土 忠行		
鳳笙	白山 和洋	柴田 徳満	岩田銀太郎
箏	重原 次朗	岩田 真周	澤田 佳子
龍笛	渡辺 歌織	原 光太朗	高野 正子

げんじょうらく 太食調 還城楽

太食調の曲で、林邑楽に属する曲。この曲は、管弦楽と舞楽ともに現存し「還城楽」という曲名の由来は、「見蛇楽（ケンジャラク）」が転じたもの。舞楽「還城楽」は「見蛇楽」の文字のごとく中国の西方に住む人が蛇を好物として食べており、蛇をみつけてよろこぶありさまを舞楽にしたと伝えられている。

琵琶	岩田法智華		
箏	杉本沙也果	木全 結菜	
鞆鼓	玉樹 智史		
太鼓	佐藤 芳彦		
鉦鼓	白土 忠行		
鳳笙	白山 和洋	柴田 徳満	岩田銀太郎
箏	重原 次朗	岩田 真周	澤田 佳子
龍笛	渡辺 歌織	原 光太朗	高野 正子

舞楽

りょうおう 左方 陵王

中国・北齊の蘭陵王長恭は大変は美しく、部下がみとれるほどの容姿だったため、味方の兵士たちの士気を高めるようと獐猛な仮面をつけて指揮をとり勝利を数多く収めた。舞を舞う姿は馬上で指揮をとるさまを表している。

舞人	野口 俊行		
鞆鼓	玉樹 智史		
太鼓	佐藤 芳彦		
鉦鼓	白土 忠行		
鳳笙	柴田 徳満	白山 和洋	岩田銀太郎
箏	重原 次朗	岩田 真周	浅井 恭史
	樋口 好文	澤田 佳子	
龍笛	渡辺 歌織	原 光太朗	岩田法智華
	今枝 弘成	高野 正子	

なそり 右方 納曾利

『陵王』と番舞（つがいまい）の関係にある舞曲。高麗楽にあたる舞楽、舞は二人の走り舞で二匹の龍がたわむれ遊んでいる様子を舞にしたものといわれており、平安時代には競馬や勝者に賭物が与えられる賭弓（のりゆみ）、相撲の節会（せちえ）で舞われ、左方が勝つと『陵王』が、右方が勝つと『納曾利』が舞われた。

舞人	杉本沙也果	木全 結菜	
三鼓	岩田法智華		
太鼓	佐藤 芳彦		
鉦鼓	白土 忠行		
箏	岩田 真周	重原 次朗	浅井 恭史
	樋口 好文	澤田 佳子	
龍笛	原 光太朗	渡辺 歌織	木崎 真琴
	高野 正子		

ちょうげいし 長慶子

源博雅（みなもとのひろまさ）の作曲といわれる太食調の曲で、舞はない。「ちょうげいし」とも読む。古くより参集者が退場する音楽「退出音声（まかでおんじょう）」として用いられ、現在でも舞楽会の締めくくりの曲として演奏されるのが慣例となっている。退出音声の際は管楽器と打楽器で軽快に合奏され弦楽器は入らない。

三鼓	岩田法智華		
太鼓	佐藤 芳彦		
鉦鼓	白土 忠行		
鳳笙	柴田 徳満	岩田銀太郎	萩原 和洋
箏	岩田 真周	重原 次朗	浅井 恭史
	樋口 好文	澤田 佳子	
龍笛	原 光太朗	渡辺 歌織	木崎 真琴
	今枝 弘成	高野 正子	

※1000円以上寄付して頂いた方には本日の公演DVDを送付させていただきます。封筒にアンケート用紙を添えて募金箱までお願いいたします。

なお、次回第7回は平成29年11月23日（木・祝日）開催予定です。

皆様のご来場心よりお待ちしております。

手元に眠っている楽器などございましたら、破損している物でも結構ですので当会にご寄付頂けると幸いです。